

全市大の学生、院生、教職員に訴う！

4~6月闘争に向けて

4.28実行委の結成を

市民の多くは、我々は、まさに今、70年代に目撃した、史的転機を待つところである。60年代以来、以前の日本新左翼急進主義運動の清算としての、昨秋の政変我々が切り開いたあらたな地平は、それに、るさめい、肉体的闘争をもった権闘闘争の展開を、我々に要求している。我々につぎつけられた課題は果敢に責任の重さに応じて、それを担うべき、主体の状況は、昨秋の政変の我々の側の一定の敗北の結果、きわめて活しいものであることは事実である。11月中旬佐ト・ニクソン会談後なされた日米共同声明は72年にわたって、日本のアジアへの飛躍とその予備としての沖縄の帝国主義的支配の確立を明らかなにした。70年-72年は、アメリカ帝国主義のなエトナムから、一定の軍事的後退と、政治・経済の統一の支配から、政治・経済と軍事とも分離し、日本に、その一歩を肩代わりさせるという方針である。日本、側ならずれば、戦後二十五年間のアメリカ帝国主義の軍事的保護の下、城内五社を襲撃し、国内の高度な資本蓄積をひしき、いまや、韓国のみならず、台湾、東南アジアへの市場を求めている。経済的進出の背景として軍事力増強が日本にとって焦りの課題となっている。それは、あらゆる国民的運動として、こゝろにあった自衛隊の名をもちに資本主義軍閥としての転化であり、それは、具体的には、四次防の整備であり、非難、後退の同止である。しるかに沖縄人民の闘争は、戦後25年間にアメリカ帝国主義に対する反坑・基地撤去に対する農地上昇闘争の闘争、そして自治権を要求する闘争が、ベトナム戦争の教訓に根ざされて352撤去、垂れス撤去という具体的目標の闘争から、現在的には、基地撤去、米軍政打倒、安保紛争はスローガンにあげられる段階に達している。昨年24ゼネストを自らが生み出した「革新主席」を筆頭とした改良主義階級の襲撃により、多産させられた。沖縄の人民は65闘争を媒介し、11/3には従来の「悲願」としてあった「単独本土復帰主義」を絶頂的に登場し、佐ト米阻止闘争を闘った。我々は、70年代沖縄闘争の主軸である全軍勢にかけられる大量解雇・配置転換という、米日ブルジョア階級の攻勢を断絶として考案し、沖縄闘争をその本来の方向としての反軍閥植民地闘争として推進しなければならぬ。

四-六月闘争は全軍勢になけられた大量解雇自衛隊回を対峙線とする沖縄人民総体と、日米帝国主義ブルジョア階級の路線の対決であり、我々、本土の人民は総力をあげて、この闘争を支援し出すべきである。そこには獲得されるべきには70年代闘争を語ることはできない。

昨年6.20大憲法府砕闘争に端を発し、6.15.10.21.11.13.12.13 の議院闘争と同時に市大に於ける共闘・学闘入り降参の過半と、物産物砕闘争を、二千名の学生大会とストライキを闘った。我々はいま、四-六月闘争を前に、四二八実行委を結成さなちとらんとしている。全ての学生、院生、教職員は、4.28実行委に結集する事を呼びかける。

4.28実行委(準)マニフェスト